まちが育む想い、希望、そして夢　福智に生きる

人々

福智町で見つけた豊かな暮らし、私らしい生き方。

自分らしい生き方、暮らし方を実践する人が増える昨今、ここ福智町でも都会からの移住者やUターンなどの定住を歓迎しています。三家族のみなさんに、きっかけや住んでみて良かったことなど、移住者ならではの視点で福智町の魅力を語っていただきました。

稲垣さんご一家
愛知県から福智町へ

子どもたちのために、支えてくれた町の人のために、福智をもっと楽しいまちにするお手伝いを。

愛知県の自動車部品の関連会社で、バドミントンの実業団チームに所属していた稲垣寿一さんと和子さん。平成19年に結婚した後も、ともにアスリートとして活躍を続けてきました。転機は平成21年。福智町に住んでいる稲垣さんのお父さんが倒れ、家業を継ぐためUターンすることになったのです。突然の移住話に戸惑ったのは、当時妊娠中だった和子さん。「えーっと思いました。結婚前に福智町の夫の実家に行ったことがあったんですが、何もないところだな、という印象だったので(笑)。知り合いもいないし、悩みましたが、アスリートとして自分で引き際を感じていたこともあり、区切りをつけるいいきっかけかなと」。

長女の出産を経て、平成22年の夏から家族3人での福智町の暮らしがスタート。移住した当初の印象は、「やっぱり何もないな、と(笑)」。けれど、暮らすうちに分かってきたのが、ここには「ふれあい」があるということ。「初対面でもみんな笑顔で声をかけてくれますし、子どもたちもよくおやつをいただいています。人の温かさに触れて、今は住んで良かったなと思います」。

移住後に長男が誕生し、現在、和子さんは3人目のお子さんを妊娠中。移住当初は孤独感や情報不足に悩んだこともあったと言います。でも、「最近思うのは、何もないなら自分が作ればいいということ」と和子さん。子育てサークル「こもれび」を自ら立ち上げ、若いママたちの交流が活性化するよう奮闘中。寿一さんは商工会青年部の副部長としてまちづくりに積極的に参加し、バルーンフェスタでは実行委員長も務めています。「福智町は人が温かく、自然も食材も豊か。無農薬のおいしい野菜が身近で手に入るのも魅力です。あとは町外から来た人がもっと楽しめるような場所があればいいよね」「そうそう、カフェや雑貨屋さん、スイーツショップなど、女子目線がもう少しあればいいんじゃないかな。大きなイベントも魅力的だけど、歩いて楽しめる福智のまちづくりも必要だと思います」。

移住して5年。いまやすっかり町民として、まちの未来を考える稲垣さん夫妻。「たくさん点在している福智町の魅力をつないで発信していきたい。それが、移住してきた私たちにできることであり、受け入れてくれた町の人々への恩返しかなと思っています」。

岩井原さんご一家
直方市から福智町へ

家のすぐ裏はプライベートキャンプ場。豊かな自然の教材に囲まれて、日々を営む幸せ。

岩井原賢さんの趣味はオフロード車での山間ドライブ。あるとき、たまたま通りがかった福智町・上野の道すがら、小さな「売地」の看板を目にします。「ちょうど敷地の広い土地を探していましたし、田舎暮らしをしたいという思いもあって。何よりそのとき見た福智山がすごくきれいで、ここに住みたいと思ったんです。カミさんに相談したら思いのほか乗り気で、『行こう、行こう』って」。トントン拍子に話が進み、購入した土地にやがて家が完成。「福智町は土地が安く、直方の家と土地を売ったお金でここに家が建てられたことも良かったですね」。

果樹園に囲まれた一軒家で上野の住人となって11年。当初、夫妻の唯一の心配事だった「町の人に受け入れてもらえないのでは?」という心配もまったくの杞憂だったと言います。「近隣の方々がすごく気さくに話しかけてきてくれて。おかげで移住してすぐ地域に溶け込めました。子どもたちがお年寄りと接する機会が多いのもいいことですし、子ども会やPTA活動を通してたくさんの人と親交が深まりました」。

そんな岩井原さん一家の楽しみは、家族みんなでのキャンプ。といってもキャンプ場などに行く必要はありません。「実は家の裏の空き地を使わせてもらっているんです。プライベートキャンプ場ですね(笑)。焚火や虫取りもできる。家のまわりすべてが、子どもたちにとって絶好の遊び場です。広々とした土地と静かな環境は、遊びに来る友人や兄弟にも羨ましがられます」と賢さん。由利加さんも、「旅行などから福智町に帰ってくるとほっとしますね。あ〜やっぱりここがいいなって」さらに、福智町の食の豊かさも住んでみて実感したことのひとつ。旬の野菜や果物はもちろん、猪肉のおすそ分けが舞い込むこともしばしばです。

山の美しさに惹かれ、移り住んだ福智町。静寂をさえぎるものは何もなく、遠くを走る電車の音までもが岩井原家までやさしく届きます。「都会では考えられない静けさですよね。夕方になると、山に住むシカのピィピィという鳴き声も聴こえてきます。ウサギもいる、イノシシもいる。イタチ、アナグマも見ます。そういうところです、ここは」。四季折々に姿をかえる福智の山々に抱かれ、岩井原家の日々の営みは穏やかに紡がれていきます。

水口さんご二家
北九州市から福智町へ

新たな故郷への感謝を手のひらに込めて。陶郷上野で生み出される、趣深い器。

四季折々の花や木の実がさりげなくしつらえられた工房で、「耕窯」水口耕一さんが静かにろくろを回します。シンプルで上品な磁器あり、ぬくもりある土ものあり。水口さんの器たちは、かたちも趣きも多彩な作風が魅力です。

実は耕窯は、上野にあって上野焼ではない、福智町では珍しい窯元です。もともと北九州市で陶芸家として活動していた耕さん。8年前、上野焼の作家が関東に引っ越すため、自宅兼工房を若い作家に譲りたいという話が舞い込み、縁あって譲り受けたのが耕さんでした。当時交際していた沙織さんも一緒に移住。福智町で結婚し、2人の子どもに恵まれました。移住にあたって一番の心配事だったのが、「上野焼でない作家が上野の土地に入っても良いのだろうか?」ということ。「土が違うので上野焼とは名乗れませんし、自分たちのやきものは茶陶ではなく、ふだん使いの器でしたから」と耕さんが振り返ります。

「ところが、です。近所の人が本当に優しく迎えてくださった。冬に引っ越してきたんですが、まず『寒いでしょう』とストーブをくださったのには驚くやら感激するやら(笑)。とれたての野菜をいただいたり、家庭菜園で育てた花や木の実を『展示室に飾ったら』と持ってきてくださったり。作った器に木の実を添えて展示していたら、お客さまからも『いいわね』と好評で。上野の作家さんたちも、『頑張ってるか?』とわざわざ訪ねてきてくださいます。そのたびに心が温かくなりますね」。

耕一さんが作陶にはげむ傍ら、沙織さんは家庭菜園にいそしみます。「福智町に来て野菜作りを始めたんです。よく育つので、毎日沢山食べます。しいたけも原木栽培で大量に採れますし、今は台風でダメになってしまったんですが栗や柿、びわの木もあって毎年おいしくいただいていました。桜も見事で、春は家の中からお花見ができるのもこれ以上ない贅沢ですね」もともと田舎暮らしに憧れていた耕一さん。沙織さんの反対を押し切り、とうとうお風呂まで薪風呂に改造してしまったほど。「町の方たちが材木をわざわざ薪にしてくれて分けてくださるんですよ。本当に親切で…」生き生きと語る耕一さんの横で、思わず微笑む沙織さん。「正直不便はあるけど不満はないです。福智町は温泉もあるし景色もいい。住むには本当におすすめです」。